２年目を迎えたコロナ禍における大学教育

教育研究紀要委員長
スポーツ健康科学部教授
矢田貞行

東海学園大学スポーツ健康科学部『教育研究紀要』第７号が刊行の運びとなりました。令和３年度も令和２年度と同様､引き続きコロナ禍の下での大学教育が継続しています。今後もその終結については先行き不透明であり、まだ後数年はこのような状況での大学教育の展開が想定されます。

文部科学省が令和３年10月に行った調査によれば（「新型コロナウィルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査（結果）」)、全国1,158校の大学・短期大学のうち対面授業が８割以上（「全面的対面」36％、「ほとんど対面」29％、「7割程度対面」18％、「半分程度対面」14％、「それ以外」3％）となっています。

スポーツ健康科学部においても、講義はオンライン、演習・実技は個々の教員の判断によるとの方針の下で、対面とオンラインを併用する“ハイブリット”授業が多くの先生方の創意工夫により、執り行われてきました。一方、ここ２年間のオンライン授業の実施により、その課題としては次のようなことが指摘されてきました。

① ネット環境の不備やデバイスの欠如による画質や音質の問題、接続上のトラブルといったネット環境・リテラシーの問題
② 学生の反応が確認しづらく、授業の理解度が把握しにくいという問題
③ グループワークに対する学生・教員双方の不慣れさや課題の量の不適切さ
④ 長時間にわたるオンライン授業の疲れや、授業以外のメタルケアなどのサポート面での不備等

上記①～④の課題に対しては、大学側でも感染症対策を十分採りつつ、適宜対面授業を取り入れることにより、改善の努力を続けてきております。勿論、オンライン授業については、学生の側でも支持する声は少なくありません。他方、我々教員側でも、オンライン授業の基本的ノウハウの習得から質的向上に向けての一層の飛躍の段階に差し掛かっていることは事実です。

今後、コロナ禍がどのようになるのか皆目見通しが付きません。しかし、こうした予測不可能な時代においてこそ、これからの時代であるSociety5.0（超スマート社会：IoT、AI、イノベーション、ロボットを活用する社会）の下で、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え、社会全体のデジタル化・オンライン化・ICT活用して、持続可能な社会の創り手となることが今まさに求められていると思います。先生方１人１人の授業改善に向けてのより良い日々の取組みが、これからの本学部の命運を握って

いると確信します。コロナ禍でのこれまでのご尽力に感謝するとともに、今後の取組みに期待する次第です。